

第2回
著者と学ぶ『季刊せいてん』at 北御堂

昨年十二月十三日、「幸せってなんだろうー悪人正機の倫理学」をご執筆中の藤丸智雄氏（総合研究所副所長）を講師に迎え、「第2回 著者と学ぶ『季刊せいてん』」を開催しました。講義は、ニューヨークタイムズの真宗に関する記事（暗黒の時代に活躍するのは「不浄の者」二〇一七年二月八日・ニューヨークタイムズ国際版）、「幸せに関するアンケート」（本誌124号掲載）、「藤丸版トロツコ問題」（本誌125号）などを通して、真宗倫理の可能性を考える興味深い内容でした。以下、講義の要旨をご紹介します。

人間というものは不完全で、完全な善をなしえない、^{あやま}過つ者である。だから救いが必要だというのが真宗の教えです。ですから私たちは、これが良いことだと思っただけでも本当に良いことかどうかはわからない、という立場をいただくことができるわけです。とすると、私たちが生きている社会は不完全な者同士が作っている社会なので、なにが善でなにが悪なのかということをよく考えなくちゃならない、善悪を謙虚に問い続けなくてはいけないということが出てくる。反対に、人間は完全だと捉える人間観だったり、「これが善」「これが悪」と決まっている教えだと、この問いが不要になります。倫理というものは、勘違いしがちなんですが、「これが善」「これが悪」ということが決まりのようにはつきりしているという話ではないんです。むしろ、善悪について問うのが倫理の特徴です。

そういう意味でいうと、真宗のもっている人間観と倫理は切れないような関係になっている。人間は完全なものではないから救いが必要だという教えの中にあるからこそ、自分がどこか悪に関わっているということに向き合い続けられる。つねにそこを問い続けられる倫理的な生き方というものが可能になってくるんじゃないかと思います。

そしてそのような倫理的な生き方というのは、宗教的なものがなければ至りえないと思います。「いづれの行も^{ぎやう}およびがたき身^みなれば、とても地獄^{じごく}は一定すみかぞかし」（歎異抄第二巻八三三頁）と言われるように、ここまで自分の中の悪を見定められるのは、宗教的なものが必要です。



講座の様子。受講者の皆様からは、「とても刺激的で充実した講座だったと思います」「参加型の講義でおもしろかった」「真宗と社会との関わりについて大変勉強になりました」といった感想をいただきました。

【第3回のご案内】

日 時	2019年3月6日（水） 18:30～20:25
場 所	本願寺津村別院（北御堂）津村ホール *地下鉄御堂筋線「本町」駅すぐ
講 師	井上 見淳氏（龍谷大学准教授） *質疑進行：藤丸智雄（総合研究所副所長）
講 題	近代仏教界の巨人 金子大榮
受 講 料	無料 <input type="checkbox"/> お申し込み <input type="checkbox"/> 不要
テキスト	『季刊せいてん』no.126
持 ち 物	念珠 筆記用具 テキスト

*『季刊せいてん』（¥700）は、当日会場でもご購入いただけます。



井上見淳氏